「キューバしのぎだ」「日本で2番目に高い山を知っているか」「空は曇ってても太陽がなくなったわけじゃない」 名監督は言葉で選手を動かす　鍛治舎巧さん ＃3 【ぎふ高校野球・名将流儀】

至言　2025 年 1 月 23 日 16:09

鍛治舎巧監督（73）のインタビュー第3回は、選手の力を最大限に引き出す「名将の至言」。

母校県岐阜商での最後の指揮となった2024年夏決勝で選手にアドバイスを送る鍛治舎巧監督＝長良川球場

鍛治舎巧（かじしゃ・たくみ）　1951年、揖斐郡大野町生まれ。岐阜商高（現県岐阜商）のエースとして69年選抜ベスト8。早大を経て社会人野球の松下電器（現パナソニック）で選手、監督。全日本コーチも務めた。中学硬式野球では、枚方ボーイズ監督として12年間で12度日本一になった。高校野球はNHK解説者を25年務め、同社役員を退任した2014年春、秀岳館高（熊本）監督に就任し、3季連続甲子園ベスト4。母校監督は18年春から24年8月末まで務め、春夏4度の甲子園に導いた。現在、枚方ボーイズ監督に復帰した。

第1回 「メジャーから誘われたら、どうする？」トップ選手がパナソニック、枚方ボーイズ、県岐阜商を率いる名監督になるまで
第2回 「上に立つより役に立つ」「受けた恩は石に刻め 与えた恩は砂に書け」 2人の恩師が教えてくれたこと

―選手にとって、監督からかけられる言葉は試合で大きな力を引き出させ、さらに人生の指針となる。監督の至言は、これまで多くの選手の代えがたい大きな力になってきたと思いますが、これも2人の恩師が基ですか。

鍛治舎　早稲田大の石井藤吉郎監督に師事している時に、こんなことがあった。社会人になって2年目に名古屋球場でオール早慶戦があり、OBの私たち社会人野球の選手も3、4人入って現役と一緒に出場した。観客は3万人くらい、入っていたかな。私はデッドボールを受けて、一塁へ全力疾走した。ベンチに戻った際に、石井監督から呼ばれ、言われた。
「おい鍛治舎、スタンドを見てみろ、あの3万人のお客さんはな、オメエのデッドボールを見に来たわけじゃねえんだ。ホームランを見に来てるんだ。ああいう時はな、当たってても審判に当たってません、て言うんだぞ」。

また、日本で行われた世界大会で石井監督が全日本の監督をした。優勝候補同士のキューバ戦。一、二塁のピンチに監督が内野手とバッテリーが集まるマウンドに小走りに走って、何か話してるなと思ったら、突然笑い声が巻き起こった。続いて投手交代があり、リリーフが何とか後続を抑えた。

その試合は結果的に1―2で負けたが、あの場面、マウンドにいたのはパナソニックで1年先輩の長谷部優さん（慶大）。「みんな笑ってましたけど、何があったんですか？　あれ、何でした」。長谷部さんいわく「いゃな、マウンドにきていきなり『おい、長谷部代わるか？』と言われたんだ。自分から代わるとも言えないから、ハァと言ったら『ここは相手がキューバだしな、きゅうば（急場）しのぎだ』と言うんだよ。みんなで大笑いして緊迫した雰囲気が一気に前向きに変わったよ」とのことだった。

国際大会、優勝候補同士が戦う試合は大ピンチ、そんな時に笑顔でマウンドに向かい、冗談を言って、一気に雰囲気を変える。これは誰にもマネできない石井監督ならではの、とっておきの手法だと思った。

私も指導者になって、さまざまな場面で、たとえそれが同じような大ピンチであっても、冗談をよく言ってきたが、まさしく石井監督の受け売りだ。修羅場を迎えて、緊張感あふれるチームや選手たちに、当意即妙にどういう声をかければ、彼らの底力が引き出せるか、それこそが監督の仕事として一番大切なことだと思う。

石井監督は、早稲田の練習場ではネット裏スタンドの最上段に陣取り、時々おりてきて水道の水をガブ飲みする。そこが定位置だ。選手たちのプレーを見ながら、小まめに、細長の手帳に何かメモしている。何を書いているのだろう、大好きなマージャンや競馬の勝ち負けでも書いているのかな…などと思っていたが違った。

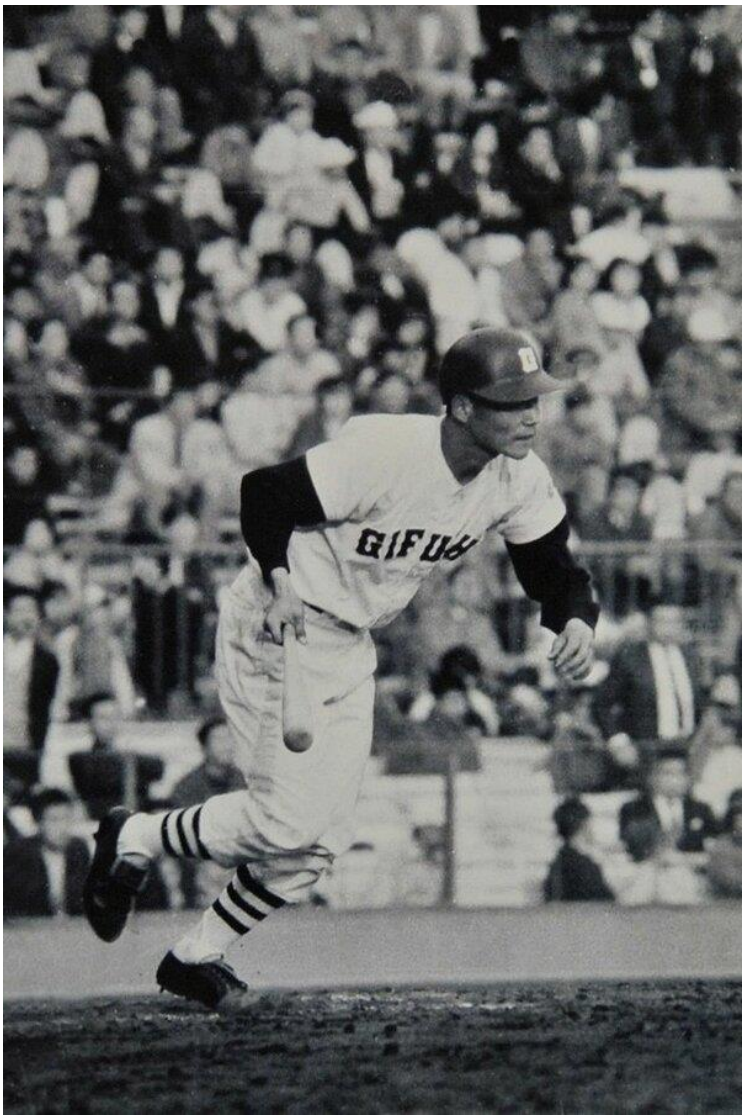
私が4年生春のリーグ戦、8シーズンぶりの優勝がかかる早慶戦前のこと、バッティングをしていると、最上段の監督から突然「ちょっときてくれや」と呼ばれた。

細長の手帳を見せながら「鍛治舎、見てみろ、フェンス沿いを走ってる大橋（功男、エースピッチャー）だけどな、3本目からタイムが20秒遅くなったんだ。オメエ仲良いんだろ、行って注意してヤレや。今週はスピード上げて走り込まなきゃいけねえんだ。俺が言うと雰囲気悪くなるといけねぇからな」。

驚いた！　開いたページには、各ピッチャーの走破タイムがビッシリと書き込んであった。いつも鷹揚（おうよう）としてアバウトに見えた監督の実像に触れ、鳥肌が立った。野球殿堂入りした雲の上のような存在の監督は、普段から選手のプレーを実によく見ていた。

―野球人生の転機となった選抜甲子園100号のメモリアルアーチ（2回戦・比叡山戦）。その時の県岐阜商・日下部政憲監督からも、一言で力を引き出してもらったとおっしゃってましたね。

鍛治舎　相手は、ドラフト候補の間柴富裕（元大洋＝現DeNA、日本ハムなど）。事実、その年のドラフト2位のピッチャーに、私はそこまで2三振に打ち取られていた。



1969年選抜2回戦比叡山戦で野球人生を変えた選抜甲子園100号のメモリアルアーチを放つ鍛治舎巧監督＝甲子園

打席に入る前に日下部先生に呼ばれ「手を見せてみろ」と言われた。人さし指から小指の下まで厚いマメがつらなっており「日本で一番スイングしている手だぞ。打てないわけはない。来た球を打て」と非常にシンプルなアドバイス。バッターボックスに入り、軸足を固めて立ったら、インコース高めにまっすぐがきて、ホームランに。打った感触はなく、素振りをした感覚だった。

それまで、なかなかチャンスで打てなかったが、このホームランをきっかけにチャンスに強いバッターになった。「来た球を打て」というのは、無心で立てということだったのかと後で悟った。

―鍛治舎監督が選手にかけた中で、特に印象深い言葉は。

鍛治舎　枚方ボーイズで初めて日本一になった時の涙の逆転スリーランは忘れられない。2002年、東京ドームでのジャイアンツカップ決勝。最終七回表、2―3で負けてて2アウト二、三塁。その時、打席に向かう1番のキャプテン前田は過度の興奮状態だったのか、肩を揺すり泣いていた。

「このままじゃ、彼本来のバッティングはできない」とタイムをかけて呼んで「ここで打ったら、本物のスーパースターだぞ」と伝えたら、少しほほ笑んで、一息吐いた。余計な力が抜けたのか、初球スタンドインのホームラン。ホームインして、今度は感激の涙を流していた。その前の大会でヒット2本しか打っていなかったが、いずれもタイムリー。

絶不調のキャプテンをなぐさめる意味で何かないかと考え、「みんなが打たない時に打つのがスーパースターだ」と言ったのを思い出しての言葉だった。「本物のスーパースター」という言葉にほほ笑んだのは、前田も私の心配りがわかっていたんだなと感じた。責任感旺盛な前田にとって、一番リラックスして自分らしさを発揮できることは何かを思って出た言葉だった。

パナソニック時代に枚方ボーイズ監督として選手に指導する鍛治舎巧監督

―でも、なかなか瞬時に最適の言葉は言えないですよね。

鍛治舎　枚方ボーイズで春夏連覇した時も、初回いきなり無死満塁になった。バッテリーを呼んで「ここで抑えたら、回らない寿司を食わせてやる」と言ったら、キャッチャーがニコッと笑った。行きのバスで「きのうは回転寿司を50皿食べたよ」と話してたのを思い出しての言葉。「ここで抑えるには得意のスライダーの連投だぞ」と言ったら三者三振で切り抜け、その勢いで、四回コールド勝ちだった。

続けて日本一になった時もみんなが決勝前に緊張しているので、「日本一高い山は知っているか」と聞くと富士山と答えた。2番目はと聞くと、誰も答えられない。「白根山（北岳）なんだぞ。でも知らないよな」。同じように日本一大きな湖はと聞くと「琵琶湖」。2番目は誰も知らない。「霞ケ浦だぞ。でも知らないよな。

やっぱり2番じゃダメなんだ。1番にならないとな」。私が何を言いたいのか分かったようで、全員の緊張がようやく取れて、「よしっ、この試合1番を取るぞ」という雰囲気になって、春夏連続日本一になった。でも前持って考えるのはダメ、その時、その場で、こちらも大きな緊張感の中で、即時即応、とっさに伝える言葉は、研ぎ澄まされ、生きていて、選手の心に響く。それが大事だと思う。

―とっさの一言が言えるのも才能じゃないですか。

鍛治舎　春夏の甲子園、NHK高校野球解説を長く担当してきた。とりわけ2006年夏の準々決勝・智弁和歌山と帝京の試合が今でも忘れがたく、記憶として強く残っている。

NHK高校野球解説者時代の鍛治舎巧監督＝甲子園

八回を終え、4―8で帝京が負けていたが、九回表に一挙8点を取って12―8で大逆転した。ところが代打を出したので、帝京はピッチャーがおらず、ショートの杉谷拳士（元日本ハム）が投げ、その後、継投策をとった。ここでまた歴史に残る大どんでん返しが起きた。智弁和歌山が5点取って、最後押し出しで13―12でサヨナラ勝ちした。帝京のメンバーが地面に突っ伏して泣きじゃくっている時にアナウンサーが「放送終了時間も迫ってまいりました。鍛治舎さん、最後に負けた帝京のナインに一言」と言う。

夏なのでもう後がない。何て声をかけたらいいんだろう…と言葉に窮した。脇の下を冷たい汗が流れ落ちるのを感じながら、困り切ってふと空を見上げると曇っている。「見上げれば空は曇っていますが、太陽がなくなったわけじゃない。帝京の選手には、それぞれの太陽に向かって頑張ってほしいですね」と言ったら、これがすごくうけて、視聴者の皆さまから手紙や電話がいっぱいきたそうだ。

みんな強烈な印象に残ったのか「空は曇ってても太陽がなくなったわけじゃない」はその年のはやり言葉になった。この時につくづく、あらかじめ用意した言葉はダメだな、切羽詰まって出てくる言葉じゃないと、と痛感した。指導者としても、そういことが何度もあった。＝つづく＝。（聞き手・森嶋哲也）